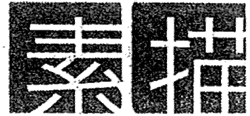


岐 阜 新 聞

岐阜県は近代養蜂発祥の地であり、本場です。明治中期に巢箱とセイヨウミツバチを用いた欧米式の養蜂が始まり、秋田屋本店六代目当主中村源次郎(曾祖父)は、岐阜加和屋町(現在の岐阜市本町一丁目)で、巢箱の製作を契機に、養蜂の世界に進出しました。秋田屋本店は、1804年に初代中村源次郎が材木商を興し、代々銘木秋田杉を扱ったことから秋田屋と号しました。岐阜で最初に洋服を着たと伝えられる六代目は新しいもの好きで、吹米から紹介された養蜂に飛び



200年企業

秋田屋本店 社長 中村 正

つき、秋田杉から巢箱をつくり、同時に、ミツバチや「秋田屋商報」の発行の研究を始め、近代養蜂の発展の原動力となる「いろは巢礎」を完成させました。巢礎はミツバチの巣の基礎となる、ミツロウから作られる六角形の凹凸の入った板状の資材です。当社で125年間、凹凸の入った板状の資材にわたり、製造販売し続けるロングセラー商品であり、ベストセラー商品です。六代、七代、八代の三代は、養蜂問屋として種々買ってきた「商いへの蜂や器具を作り、商ってききました。いずれも研究熱心で、進取の気性に富み、新製品の開発と同時に

岐 阜 新 聞

新年を迎え、毎年、京都の伏見稲荷大社へ初詣にまいります。商売繁盛を祈願しますが、物心ついた頃から父に連れられ、伏見の山々を駆け回った想い出がよみがえります。父は祖父の死去に伴い、八代目中村源次郎を襲名、昭和22年より家業の秋田屋本店を継承しました。昭和26年生まれの私は、父の半世紀にわたる養蜂事業に携わってきた前半の姿を、子の立場から見つめ、後半を会社の上司として、そのもとの一緒に働いてきました。



事業継承

秋田屋本店 社長 中村 正

私が金華小学校に在学時、「仕事は何のためにするか」という宿題があり、「お金を儲けるため」と答えたのを父が知り、「仕事は世のため人のためにするもの」と烈火の如く怒り、叱られたことが脳裏に焼きついていまも。その時、怖かったと同時に、すがすがしい気持ちになり、父の偉大さを感じました。養蜂問屋という家業の中で育ち、物づくりと商いの中で生活するうち、自然に将来は家の仕事を継ぐものとの自覚が育まれ、この道に一直線に進んできました。振り返れば、父が亡くなり14年、私もこの道に入り39年の年月が経ちました。「勤労・平和・友愛」で貫かれたミツバチの精神を見習い、「ミツバチとともに」歩む事業を通して、社会に役立ち、どう寄与できるかを問います。また、これからのありたいと思います。環境にやさしく、人にやさしい素晴らしい事業を継承できたことへの感謝の日々です。新年にあたり、今年もミツバチを通して社会貢献ができるよう精一杯努めます。